

創立百周年記念論文集 下巻

九州大学文学部紀要・叢書・図書委員会

<https://hdl.handle.net/2324/7358024>

出版情報：2025-03-31. School of Letters, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

14世紀バレンシア王国北部における 村落自治と領主援助金（上）

足 立 孝

1. 序論
2. コンセホ自治と自発的奉仕（以上本号）
3. 領主賦課租徴収機構とコンセホ自治
4. 厚意なき奉仕
5. 結論

1. 序論^(*)

バレンシア王国の征服は1233～45年、ムワッヒド朝の解体にともない三つのターイファ（北部のムワッヒド朝末裔の元国王アブー・ザイド、中部の反ムワッヒド朝のザイヤーン・イブン・マルダニーシュ、南部の反乱者イブン・フード）に分裂をみた王国の内情そのままに、それぞれ北部・中部・南部と都合三回の遠征をつうじて段階的に征服された⁽¹⁾。だが、第一段階をなす1230年代の王国北部（ほぼ現カステリヨ県）の征服は、元国王アブー・ザイドの復位を支援する王権の意思に反して、アラゴン貴族が独自に展開したものであり、おもにサラゴースのフエロの賦与を梃子に組織的な入植運動を推進したのもまさしくアラゴン貴族であった。ムレーリャこそ、最有力貴族プラスコ・デ・アラゴンの死没を契機に王領地に編入されたが⁽²⁾、それでも、今日のコマルカ（郡）でいえば、東からアルカラテン（エシメノ・デ・ウレア）、アルト・ミリャルス（アブー・ザイドと、互いの子弟の結婚によりほぼその所領全体を継承したエシメノ・ペレス・デ・アレノス）、アルト・パランシア（国王ハイメ1世庶子ハイメ・デ・ヘリカならびに国王ペドロ3世庶子ハイメ・ペレス・デ・セゴルベ）

と、王国北部全域にわたって、アラゴン貴族が広く領有するところとなっている。そこには、バレンシアのフエロ（Furs de València）を共通法に、バレンシア市を中核とする固有の王国の創出を狙った王権の意思とは裏腹に、アラゴンのフエロ（Fueros de Aragón）を掲げる貴族所領が卓越した空間が生み出されたのである⁽³⁾。

ロバート・イグネイシャス・バーンズはかつて、そうした現象はあくまでも王国全体のごく一部をとらえたにすぎず、ローマ法の影響色濃い王国共通法に支えられた強力な王権と、バレンシア市に代表される旺盛な都市的かつ商業的な活動を根拠に、アラゴン王国ともカタルーニャとも異なる非封建的な性格をバレンシア王国にみてとった⁽⁴⁾。だが、1990年代以降、主流となっているのはむしろ、征服＝入植運動の進展にともない封建制は拡大を遂げたとする考え方である⁽⁵⁾。そもそも固有の王国といえども、アラゴン王国の政治的動向と無関係ではいられなかった。王権は枯渇一方の国王財政を立て直すべく13世紀をつうじてさまざまな名目で租税の導入・増強を図ったが、アラゴン王国ではそれが既存の諸特権の侵害とみなされ、ウニオン（Unión）の名のもとに結集した貴族および都市共同体の組織的な抵抗を惹起したあげく、「アラゴン総特権」（El Privilegio General de Aragón）の賦与をもって安堵することをよぎなくされている（1283年10月3日）。このとき、アラゴンのフエロを共有するバレンシア貴族もそこに名を連ねており、バレンシア王国における同フエロの適用範囲の拡大を勝ちえているのである⁽⁶⁾。

もともとバレンシア都市法を起源とするだけに、バレンシアのフエロを掲げるのはもちろん同市を筆頭とする都市共同体である。だが、以上のような法的な分裂状態は14世紀に入っても解消されることはなく、補助税の協賛においても議会立法の制定においても王国議会の部会間合意はままたまなかった。王権による補助税要求はもっぱら都市共同体、わけてもバレンシア市の間接税に依存することになり、それは同市単独の特権の拡大を可能にしたものの、議会を有名無実化するには十分であった⁽⁷⁾。こうした事態の解消が図られたのが、国王アルフォンソ4世即位後ようやく招集された1329～30年のバレンシア議会で

ある。だが、ここで制定された「アルフォンソ裁判立法」(Jurisdicción alfonsina, De jurisdictione omnium iudicium)は、貴族に対して、バレンシアのフエロを受け入れる見返りに、ローマ法由来の刑事裁判全権 (merum et mixtum imperium) を賦与するというものであった。王国共通法の一本化こそが逆説的に、領主制的支配の全面的な確立を促す契機となったとは、今日よくいわれることである⁽⁸⁾。

だが、ことは同制定法が意図するところどおりにうまく運んだわけではない。となれば、それでもなおアラゴンのフエロを堅持した貴族所領は、制定法に堂々と違反しながらも、領主制的支配の確立をみることはついぞなかったということか。そもそも貴族がその要求を実現するべく自らの特権にうったえる議会レヴェルの高度に政治的な行為を、所領内部の領民支配のレヴェルに敷衍するのははたして適当か。というのも、アラゴンのフエロであれ、バレンシアのフエロであれ、個別の規定はともかく、本来はいずれも円滑な入植を推進するべく入植者の一定の自由を保証すると約束した入植許可状に端を発するものだからである。それらは何を措いても、まずは住人の法的自由の根拠にほかならない。こうなると、バーンズの所説は、もっぱら征服直後の国王ハイメ1世の治世に重きをおいていることを差し引いても、都市＝商業＝自由／農村＝封建制＝隷属というすこぶる古典的な二項対立のそれぞれの項に、バレンシアのフエロ＝共通法とアラゴンのフエロ＝局地法とを単純に付け加えたものという印象を免れない。なるほど、王国共通法の本一化こそが領主制的支配の確立を促したとするパラドックスはじつに興味深いものである。だが、刑事裁判全権の獲得はあくまでも、所領に対する王権の介入を免れる法的な保証を得たということであって、アラゴンのフエロに代えてバレンシアのフエロによってその法的自由を保証される領民がただちに強権的かつ抑圧的な支配に甘んじなくてはならなかったことをかならずしも意味しない。そうしたロジックは結局、フエロの法的な区別こそ相対化しているものの、農村＝封建制＝隷属という古典的な二項対立の一方の項を変わず温存しているのである。

以上をふまえて、本稿では、バレンシア王国北部はミリャルス川上流域、ま

さしくアラゴンのフエロを堅持してやまなかったアレノス家の貴族領、すなわちバロニア・デ・アレノス (Baronía de Arenós) をとりあげよう。王国の一貴族に転じてキリスト教徒に改宗したアブー・ザイドの娘アルダ・フェランディスと、カラタユー出身の騎士で国王代理をつとめたエシメノ・ペレスの息子ブラスコ・エシメーネスとの結婚を起点にアレノス家が代々継承したバロニアは1355年以降、同家唯一の継承者ビオランテを娶ったデニア伯アルフォンソ（国王ハイメ2世の孫にしてリバゴルサ伯ペドロの子）のもと、バレンシア王国（デニア伯領、アヨーラ＝コルテス溪谷、バロニア）、アラゴン王国（リバゴルサ伯領）、ムルシア王国（ビリュエナ辺境伯領）にわたって分布する巨大な所領群の一つと化し、宮廷所在地ガンディアを中核に、国王財政機構のミニチュアよろしく中央化が図られた所領経営全体の一部を占めることとなった⁹⁾。この間、筆頭村落のビリヤエルモーサは、バロニア全体の領主支配拠点であり続けながらも、一貫して自らの自治を失うことはなかった。それは、アラゴンのフエロによるのか、それともバレンシアのフエロによるのか。もしアラゴンのフエロが強固に維持されたとすれば、それは、同村落が享受した自治の原因ではなく、むしろその結果ではないか。わたしたちは、それが都市であれば、国王による支配がいかに抑圧的であろうとも自由そのものが失われるとは思ってもよらないのに、貴族の領有する村落となると、とたんに隷属こそを規定値とみなしてしまう。以下では、補助税すなわち国王援助金ならぬ領主援助金に注目し、村落の自治が都市のそれとまったく同一の論理で保証されたこと、それゆえ、国王支配と都市自治とが両立するのと同様に、領主支配と村落自治とはもとより対立するものではないことを、史料にそくして具体的に明らかにしたい。

2. コンセホ自治と自発的奉仕

バロニア・デ・アレノス、すなわちアレノス領主 (dominus de Arenoso, senyor de Arenoso) の貴族領は、相続のたびに伸縮を繰り返したが、デニア伯が領有するところとなった14世紀後半には、キリスト教徒村落のビリヤエルモーサ、ビ

リヤマレーファ、ルディエンテ、スカイナ、アレノス、プエブラ・デ・アレノス、ムスリム村落のエスパディーリャ、バリヤット、トーガ、トレチーバ、エル・トルモ、シラット、パンディエル、以上13村落ではほぼミリヤルス川上流域全体を覆う一円的な所領である⁽¹⁰⁾。その呼称が示すとおり、アレノス家の家督を象徴するのは、城塞アレノスを核に形成されたプエブラ・デ・アレノスである。だが、前述のとおり、領主支配の拠点はあくまでもビリヤエルモーサであった。このように異なる機能を帯びた二つの中核村落が生まれた背景には、次のような経緯がある。すなわち、エシメノ・ペレスは1242年、子プラスコ・エシメーネスをアブー・ザイドの子アルダ・フェランディスと結婚させる一方、1243年1月28日に父子ともどもアブー・ザイドに臣従礼を捧げて、城塞アレノスを賦与されている⁽¹¹⁾。かたやアブー・ザイドはその直後の同年3月9日、王国北部ではやや例外的にムスリム残留人口の濃密な空間に、キリスト教徒の入植を募って新たな村落ビリヤエルモーサを創出するべく、入植許可状を発給している⁽¹²⁾。エシメノがはじめてアレノス領主の肩書きを帯びたのは1249年3月2日であり⁽¹³⁾、両家はアブー・ザイド死後の財産分割を内容とする兄弟盟約を1258年7月7日に締結しているものの⁽¹⁴⁾、アブー・ザイドが実際に没したのは、エシメノが王権によるムルシア遠征に随行して戦死した1266年からさらに遅れて1269年のことであった。ビリヤエルモーサは形式上、アルダの嫁資として同家に継承されることになっていたものの、プラスコがいよいよアレノス領主を継いだときでさえ、アブー・ザイドはなお存命であったのである。自らが継承した家督の象徴がビリヤエルモーサに遠くおよばないと映ったか、プラスコは1271年4月6日、プエブラ・デ・アレノスの拡充をめざして10名の既存の住人に宛てて入植許可状を発給している⁽¹⁵⁾。だが、まさしく家督の象徴と所領最大の村落とが異なることが、相続のたびにとくに後者の帰属をめぐって同家を揺るがすことになるのである。

前述のビリヤエルモーサ入植許可状では、名前の挙げられた7名のキリスト教徒とその子孫に対して、140名、もし可能ならばそれ以上の人数のキリスト教徒を入植させて新たな村落ビリヤエルモーサを創出するべく、リヤマレーファ

の城塞領域が賦与されている⁽¹⁶⁾。その内容はおおよそ次のようなものである。すなわち、すべての入植者にいかなる地目であれ当該領域の財産がもれなく分配され⁽¹⁷⁾、そこからあがる収穫の十分の一を負担するのみとし、取得した財産は領主買い戻しまたは譲渡税を負担することなく望みの相手に売却・贈与することができる⁽¹⁸⁾。主要な粉挽水車1基を入植者に賦与し、それ以外の水車・かまどは領主に留保される。向こう5年間は領主に対して、軍役に応ずる義務をもつ⁽¹⁹⁾。初穂納入はすべて自らの教会の維持にあててよい⁽²⁰⁾。最後に、入植者一般にはアラゴン王国南部のダローカのフエロが賦与され、それにそくして、メリノ（merinum 領主役人）、フエス（judices 裁判官）、アルカルデ（alcaldes 参審人）からなるコンセホ（concejo, consell, concilium 共同体当局）の創設がみとめられるというのである⁽²¹⁾。他方、やはり前述のプエブラ・デ・アレノスの入植許可状は、10名のキリスト教徒の名前を掲げて、そのほかの既存ならびに将来の住人に宛てられている。こちらの概要はこうである。すなわち、すべての入植者に城塞アレノスのすべての財産が望むままに分配され、一連の国王租税（ペイタ、モノダティクム、宿泊税、軍役および騎行義務）に服する義務を負わず、ただ領主に対してのみ奉仕する⁽²²⁾。初穂納入は入植者の手に帰せられ、城壁、街道、教会の維持、そのほか入植者の望む使途にあててよい⁽²³⁾。分配された財産は、聖職者を除くあらゆる者に譲渡可能であるが、取得者は領主への誠実と臣従礼を果たすこと⁽²⁴⁾。さらに、毎年フスティシア（justicia 裁判官）とそれに準ずる裁判役人を選出し、領主に提案、その任命を仰ぐこととなっている⁽²⁵⁾。ここにはフエロの言及こそないものの、前者と同じく全編にわたってアラゴン王国南部の入植許可状を彷彿とさせる諸規定が並んでいて、やはり住人選出のフスティシアの差配による一定のコンセホ自治がみとめられている。

ブラスコが1274年11月15日までに没すると、寡婦アルダが王権の度重なる介入に抗いつつ、自らアレノス領主（domina de Arenoso）を名乗ったが、ウニオンを率いたアラゴン貴族の一人ペロ・ホルダン・デ・ラ・ペーニャを遅くとも1285年までに新たな夫に迎えて、こちらもアレノス領主（senyor de Arenoso）を名乗っている。ちょうどこのとき、両人は国王ペドロ3世から、ピリヤエルモー

サの月曜日の週市開設特権を獲得しているのである（1285年10月19日）⁽²⁶⁾。こうしたなかで、自らの相続の行方を案じた長子ゴンサルボ・エシメーネスは1291年、ビリャエルモーサを襲撃し、同村落に常駐するバロニア全教会の管理人ペロ・ロベスを人質にとり、その城塞および村落をいっとき占領している⁽²⁷⁾。この出来事は、ビリャエルモーサが、一方ではバロニアにとって、他方ではアレノス家の長子にとって、いかなる村落であったかをそれぞれものがたっている。事実、1299年4月7日のアルダの遺言状では、亡夫とのあいだに遺した総勢9名の子（男子4名、女子5名）のうち、長子ゴンサルボに家督相続者として城塞アレノス、アラニユエル、シラット、モンタンが継承される一方、ビリャエルモーサは、ビリャマレーファおよびスカイナを継承する三子フェランド・エシメーネスに3万ソリドゥスを支払う条件で、次子エシメノ・ペレスに継承されることになっているのである⁽²⁸⁾。バロニアの再編、わけてもビリャエルモーサの回復をめざすには、補償金を支払って文字どおり買い戻すほかない。こうしてゴンサルボは、母の遺したものも含めて莫大な負債を抱えることをよぎなくされたのである⁽²⁹⁾。それはいかにして賄われたか。以下に掲げるプエブラ・デ・アレノスおよびビリャエルモーサの改定フェロはいずれも1317年、ビリャエルモーサ公証人ペロ・マルティネスの手で作成のうえ、両村落の自発的な奉仕に対する報償という名目で賦与されている。

まず、1317年8月8日発給のプエブラ・デ・アレノスのそれは、同村落のフスティシア、ベレンゲール・プラッツ、誓約人ベルナット・トルラおよびビセンテ・サンチョ、さらに8名のコンセホ全成員による厚き奉仕を称えるという出だしで、以下のとおり規定されている。曰く、コンセホはきたる5年間、総額7,500ソリドゥス、毎年聖ミカエルの祝日に1,500ソリドゥスを納付する。この間、いかなる放牧税もそのほかペイタも免除され、毎年1,500ソリドゥス、宿泊税600ソリドゥスのみを負担し、領主による騎行義務、領主子弟の結婚、領主の渡海を除きいかなる要求をもしない。灌漑地における麻畑・亜麻畑・菜園からの十分の一は免除され、初穂納入は共同体に帰せられる。アラゴンのフェロおよび慣習は保証される。民事・刑事問わずそのほかすべての領主権、軍役・騎

行義務は従来どおりすべて領主に留保される⁽³⁰⁾。他方、同年8月21日のビリャエルモーサのそれは、自発的な奉仕の中身が領主負債の弁済であったことを明記している。すなわち、ゴンサルボと妻ウラーカ・ホルダン・デ・ラ・ペーニャが抵当化したビリャエルモーサとバロニアとを償還するために6万ソリドゥスを同村落が自ら供出してくれたので、以後、聖ミカエルの祝日にペイタ1,000ソリドゥスを納付するのみとし、そのほかいかなる奉仕をも免除するというのである。以下、放牧税の免除、麻、亜麻、野菜、果実ほかの十分の一の免除、アラゴンのフエロと慣習ならびに先人により与えられた入植許可状の確認、初穂納入は共同体に賦与、最後に、軍役・騎行義務は免除されないが、それも領主個人の要請のあるときのみで、その代わり宿泊地提供義務または宿泊税200ソリドゥスを負担することとなっている⁽³¹⁾。

いずれもアラゴンのフエロおよび慣習を保証していて、一見すると似通っているようにみえるが、両者のあいだには決定的な差異がある。すなわち、前者では、ペイタほか通常賦課租が宿泊税を除き5年間の年限つきで全面的に免除されて、その代わりに一定の額面の金銭が要求されているのに対して、後者では、とくに年限も明記されることのないまま、ペイタ以外の通常賦課租が宿泊税を除き免除されて、ペイタそのものの額面が規定されているのである。ペイタ（peyta アラゴン王国ではペチャ〔pecha〕、カタルーニャではケスティア〔questia〕）は、語源的には「要求」（petita, questia）を意味し、本来は王権が都市・国王ウィラに要求した「援助」（auxilium）名目の恣意的かつ集団的な賦課租である。だが、周期と額面とが慣習化することでそれ自体通常賦課租の中核を占めるようになり、都市・国王ウィラはそれを定期的に納付するべく、自ら住人の財産を「ソリドゥスとリブラで」（per solidum et libram）貨幣換算して単位査定額あたりの負担額を決定し、住人に事実上の租税として賦課かつ徴収する機構を発達させてゆくなかで、自治的な市政とそれを支える固有の財政を具えるようになるのである⁽³²⁾。この場合のペイタの背後にも、同様の過程を見通してまったく差し支えない。フスティシアと誓約人とが自治的に差配し、領主に「厚き奉仕」を遂行できるような、固有の財政を具えたコンセホが入植許

可状からほぼ半世紀を経てすでに確立をみていたのである。そうでなくては、ビリヤエルモーサが自ら6万ソリドゥスもの領主負債を肩代わりして⁽³³⁾、バロニアを償還することなどできなかったはずである。

となれば、両者の規定の差異は次のように説明される。すなわち、プエブラ・デ・アレノスのそれは、「援助」(ajuda, ajut)ということばこそ用いられていないものの、一定の年限で一定額の金銭を供出する領主援助金の典型であり、報償の側面があるとすれば、通常賦課租（ペイタ、放牧税、収穫の十分の一）が免除されていることであるが、それ自体は王権が要求する補助税＝国王援助金とまったく同じやり方なので、この部分だけでいえば報償の賦与どころか新たな奉仕の要求となっている。これに対して、ビリヤエルモーサのそれは逆に、それまでの奉仕に対するまさしく報償であり、ペイタおよび宿泊税200ソリドゥス以外の通常賦課租は免除、ペイタ1,000ソリドゥスという額面もおそらく減額されたものである。遅くとも1339年3月20日には4,200ソリドゥスとなっていて⁽³⁴⁾、この額面はデニア伯の領有下でもそのまま継承されるので（後述）、本来は同額であったかもしれない。ここでは年限が設定されていないが、宿泊税を除く減額分3,000ソリドゥスが20年で6万ソリドゥスに達するから、その可能性は十分にありうる。重要なことは、家督を象徴するプエブラ・デ・アレノスを差し置いて、ビリヤエルモーサが自ら破格の領主援助金を供出し、実質的な中核村落としてアラゴンのフエロを共有するバロニアの一体性を是が非でも守ろうとしたということである。それはちょうど、バレンシア市が、財政の枯渇に迫られてたびたび王領地の売却を図る王権に抗して、自らを中核とする国王裁判管区を強固に維持しようとしたことと同じである⁽³⁵⁾。ただ、最大の問題は、中核村落を自任するビリヤエルモーサそのものが、アレノス領主の世代交代のたびにバロニアから切断されてしまう危険性があることであった。

この点は、多額の負債を抱えたゴンサルボも十分心得ていたようであり、さっそく翌1318年4月8日、マルケーサ・ロベス・デ・ラーダを妻に迎えた長子ペロ・ホルダンに、ビリヤエルモーサを含むバロニア全体を生前贈与している⁽³⁶⁾。両親存命中は、必要に迫られてバロニアを抵当化する場合でも42万ソリドゥス

を超えてはならないとする規定がわざわざ付されているあたり、以上をふまえれば十分に理解できようというものである。なんとその1年後の1319年12月3日、今度はペロ・ホルダンが、生まれたばかりの子ゴンサルボ・ディアスにバロニアを早々と生前贈与している⁽³⁷⁾。これも、ビリヤエルモーサの意思に応じて従来のバロニアの一体性を維持しようとしたアレノス領主の配慮とみるのはたやすい。ところが、ここで列挙された村落のなかには、ビリヤエルモーサの放棄をめぐつて、次子エシメノの同名の子エシメノ・ペレス（ゴンサルボ・ディアスの従伯父）が補償金10万ソリドゥスの支払いと引き換えに要求した隣接村落コルテス・デ・アレノスが含まれる一方⁽³⁸⁾、危惧したとおりというべきか、当のビリヤエルモーサが欠落してしまっている。コルテス・デ・アレノスは1325年にペロ・ホルダンが没するやエシメノ・ペレスの掌中に帰せられたか、国王アルフォンソ4世が同人の所領を安堵した1330年11月4日には間違いなくその一部をなしている⁽³⁹⁾。これに対して、ビリヤエルモーサは、今度はペロ・ホルダンの弟サンチョ・ドゥエルタの強硬な要求を免れなかったのである。

1329年8月29日、サンチョ・ドゥエルタがビリヤエルモーサの一部住人を率いてオンダの家畜を略奪したとして、国王アルフォンソ4世が、ペロの寡婦マルケーサに下手人の処罰を命じている⁽⁴⁰⁾。だが、1331年3月15日、当のビリヤエルモーサが自らの声を上げている。すなわち、そのフスティシア、誓約人、代理人のファン・デ・カサ、ペロ・セラーノ、ドミンゴ・アラウ、エステバン・フストがバレンシア市の国王法廷に訴えて、ビリヤエルモーサおよびシラットの領主を名乗るサンチョ・ドゥエルタに臣従礼を捧げることを拒否する、自らの領主はひとりゴンサルボ・ディアスのみと主張したのである。サンチョ側の主張は、ゴンサルボが成年に達しておらず臣従礼を捧げることはできないというものであった。国王アルフォンソ4世は、サンチョが本来いかなる権利をもっていないので、ビリヤエルモーサが自らの領主として、ひとまず母マルケーサに臣従礼を捧げるようにと裁定している⁽⁴¹⁾。むろん、これで事態がおさまるはずもなく、サンチョは1332年初頭の段階でもなお、城塞ビリヤマルールを筆頭に父ゴンサルボのものであった村落を不当に領有しており、王権は同年

3月16日、同城塞を国王守門官に明け渡すよう目下要求しているところであるとしている⁽⁴²⁾。

この問題の最終的な解決は、1340年後半を待たなくてはならなかった。1337年3月6日～4月6日には、同年のビリヤエルモーサ誓約人ロレンソ・ピコンが、サンチョから権利放棄書を獲得するべく、住人のディアゴ・ペレス・デ・セーリャ、ドミンゴ・ビダル、ロドリゴ・カポーネス、ロドリゴ・デ・ラ・アスッド、フアン・ナバーロ、ミゲル・ルイスにその対価となる金銭を委託することを決定している⁽⁴³⁾。王権は1337年12月1日、国王守門官ギリエム・フステロを城塞ビリヤマレーファに派遣し、サンチョの妻シビラ・ビリヤノーバに対して、サンチョがビリヤエルモーサで捕虜にとったゴンサルボ・ディアスの家士（*vasallos*）を解放せよとする国王命令を発している⁽⁴⁴⁾。ここでいう家士はむろん、権利放棄書の獲得をめざして交渉に臨んだ前述のビリヤエルモーサ住人に違いない。ゴンサルボ・ディアスは1338年2月後半から3月14日にかけてようやく、それまで「度重なる紛争」（*muytos pleytos*）を繰り返したサンチョとの交渉に自ら乗り出し、サンチョの娘ウラーカ・ホルダンおよびサウラに相当額金銭を補償金として支払うことで、ついに権利放棄に向けて合意が図られることになった⁽⁴⁵⁾。もっとも、なかなか額面の合意にいたらず、補償金4,000ソリドゥスが支払われたのはようやく1340年11月25日のことであった。このときゴンサルボ・ディアスは、サンチョの娘の代理人をつとめるアルボカセル公証人から4,000ソリドゥスの3分の2に相当する2,666ソリドゥス8デナリウスを借り入れると同時に、全額を同公証人に支払っている⁽⁴⁶⁾。とはいえ、ゴンサルボ・ディアスはあくまでも、権利放棄書を獲得して自らバロニアにとどまろうとした前述のビリヤエルモーサ住人の代理人という立場でそれを支払ったのである。それは、アレノス領主ならぬビリヤエルモーサのコンセホそのものが、自他ともにみとめるバロニアの中核村落として、その一体性を維持することを自発的に選択したことのあかしである。

国王アルフォンソ4世は1330年11月4日、ゴンサルボ・ディアスの従伯父エシメノ・ペレスに対して、コルテス・デ・アレノスほかの領有を民事・刑事裁

判全権の賦与とともに確認、あらゆる流通諸税の免除を加えて安堵している。その冒頭では、アラゴンのフエロとバレンシアのフエロとの並存が王国全土に深刻な分断をもたらしてきた、いまやエシメノ・ペレスはほかの騎士同様、アラゴンのフエロを放棄し、バレンシアのそれを受け入れたのであり、それが王国全体の利益にかなう奉仕であるから、当該特権状の賦与におよんだとしている⁽⁴⁷⁾。これこそ、冒頭で言及した「アルフォンソ裁判立法」の個別適用事例である。これに対して、ビリヤエルモーサの住人とゴンサルボ・ディアスは1334年7月29日においてもなおアラゴンのフエロを用いており、バレンシアのフエロに従わなくてはならない、国王ペドロ4世がシチリアに発つまえに王国のすべての貴族がバレンシアのフエロを受け入れるようにとする命令に違反しているという、王権ならびに議会代表部の圧力の矢面に立たされている⁽⁴⁸⁾。10年後の1343年5月7日、国王ペドロ4世はゴンサルボ・ディアスに、ビリヤエルモーサおよびシラットにおける、流通にかかわるあらゆる国王諸権利、すなわち流通税、通行税、度量衡税、入市税、放牧税、食肉税、家畜税をバルセローナ貨8,000ソリドゥスで売却している⁽⁴⁹⁾。むろん、これはあくまでも同時期に相次いだ王領地売却の一環であって、アレノス領主がアラゴンのフエロに代えてバレンシアのフエロを受け入れたことをまったく意味しない。アラゴンのフエロを堅持したのはまずもって、バロニアの中核村落であることを自らに任じ、その一体性を失うまいと自発的に奮闘してきたビリヤエルモーサであって、アレノス領主が同村落を実質的な中核とするバロニアをまがりなりにも解体させずにすんだのは、その意思を汲んでアラゴンのフエロを保証するかぎりにおいてのことであったのである。

(以下次号)

注

- (*) 本稿で利用される略記号は次のとおりである。ACA: Archivo de la Corona de Aragón; ADPC: Archivo de la Diputación Provincial de Castellón; AHN: Archivo Histórico Nacional; AHPZ: Archivo Histórico Provincial de Zaragoza; AMP: Archivo Municipal de Puertomingalvo; AMV: Archivo Municipal de Valencia; ARV: Archivo del Reino de Valencia; AVJI: Arxiu Virtual

- Jaume I. Documents d'època medieval relatius a la Corona d'Aragó (<http://www.jaumeprimer.ujj.es>); BRAH: Biblioteca de la Real Academia de la Historia; DJI: A. Huici Miranda y M. D. Cabanes Pecourt, *Documentos de Jaime I de Aragón*, 7 vols., Zaragoza, 1976-2017.
- (1) R. I. Burns, Almohad Prince and Mudéjar Convert: New Documentation on Abū Zayd, *Medieval Iberia. Essays on the History and Literature of Medieval Spain*, New York, 1997, pp. 171-188; id., Daughter of Abū Zayd, Last Almohad Ruler of Valencia: The Family and Christian Seigniorship of Alda Ferrándis, *Viator*, no. 24, 1993, pp. 143-187; R. Ferrer Navarro, Repoblación y feudalismo en el reino de Valencia, *En torno al feudalismo hispánico*, Ávila, 1989, pp. 401-416; E. Guinot Rodríguez, La implantació de la societat feudal al País Valencià del segle XIII: la gènesi de les senyories i l'establiment de les termes, *El temps i l'espai del feudalisme*, Lleida, 2004, pp. 421-442.
 - (2) J. Sánchez Adell, La comunidad de Morella y sus aldeas durante la Baja Edad Media (Notas y documentos), *Estudis castellanencs*, no. 1, 1983, pp. 98-102.
 - (3) J. V. Gómez Bayarri, Cartas pueblas valencianas concedidas a fueros aragoneses, *Aragón en la Edad Media*, no. 20, 2008, pp. 391-412.
 - (4) R. I. Burns, *Muslims, Christians and Jews in the Crusader Kingdom of Valencia: Societies in Symbiosis*, Cambridge, 1984, pp. 26-27.
 - (5) E. Guinot Rodríguez, *Feudalismo en expansión en el Norte Valenciano: antecedentes y desarrollo del señorío de la Orden de Montesa: siglos XIII y XIV*, Castelló de la Plana, 1986; id., Origen i evolució del feudalisme al Maestrat de Castelló (segles XIII-XIV), *Estudi General*, vol. 5-6, 1986, pp. 311-323; id., La creació de les senyories en una societat feudal de frontera: el regne de València, *Revista d'Història medieval*, 8, 1997, pp. 79-108.
 - (6) ARV, Real Cancillería, Pergaminos reales, no. 138 (1283, X, 3). とはいえ、王権とウニオンに連なるバレンシア貴族との対立はこれをもって解消されたわけではなく、同年12月になってもなお、アラゴンのフエロをめぐるさまざまな要求が王権に突きつけられている。S. M. Cingolani, *Diplomatari de Pere el Gran. 1. Cartes i pergamins (1258-1285)*, Barcelona, 2011, no. 360 (1283, XII). ウニオンと「アラゴン総特権」については、L. González Antón, *Las Uniones aragonesas y las Cortes del reino (1283-1301)*, vol. II: Documentos, Zaragoza, 1975; E. Sarasa Sánchez, *El Privilegio General de Aragón. La defensa de las libertades aragonesas en la Edad Media*, Zaragoza, 1984. また、拙稿「14世紀前半アラゴン南部における租税・領主制・商品交換」『史学研究』第305号、2020年、115-117頁；同「14世紀前半バレンシア＝アラゴン王国境界における村落共同体と流通回路—ビリャエルモーサとプエルトミンガルボ①—」『史学研究』第310号、2021年、63-64頁。
 - (7) V. Baydal Sala, *Guerra, relacions de poder i fiscalitat negociada: els orígens del contractualisme al regne de València (1238-1330)*, Barcelona, 2014, pp. 165-181, 376-423, 463-501; id., La evolución del monedaje o morabati en el reino de Valencia entre 1266 y 1385, *Fisco y moneda. El uso del dinero en las economías de los reinos hispanos, siglos XIII-XVIII*, Santander, 2020, pp.

1-30.

- (8) E. Guinot Rodríguez, *La implantació de la societa feudal*, pp. 421-442; V. Baydal Sala, *Els orígens de la revolta de la Unió al regne de València (1330-1348)*, València, 2013, pp. 13-26.
- (9) J. Castillo Sainz, *Alfons el Vell, duc reial de Gandia*, Gandia, 2012, pp. 106-123; B. Tomás Botella, *El condado de Dénia en tiempos de Alfonso el Viejo: rentas y poder señorial*, València, 2013, p. 13; 拙稿「補助税と領主援助金とのほざまで—14世紀後半アレノスのバロニアにおける世帯申告記録—」『西洋史学報』第49号、2022年、33-75頁。
- (10) 拙稿「14世紀後半バレンシア北部における村落共同体・領主・国家—アレノスのバロニア会計記録とピリャエルモーサー」『西洋史学報』第50号、2023年、125-151頁；同「補助税と領主援助金とのほざまで」43-64頁。
- (11) ACA, Cancillería, Pergaminos de Jaime I, no. 1025 (1243, I, 28).
- (12) ARV, Manaments i Empars, 1632, llibre 6, mà 60, ff. 18-19v; AVJI, doc. no. 387 (1243, III, 9).
- (13) AHN, Órdenes religiosas, Valencia, Monasterio de la Puridad de Franciscanas, signatura antigua, sala 6, cajón 497 (1249, III, 2); AHN, Clero, Valencia, carpeta 3272, no. 6 (1249, III, 2).
- (14) ARV, Reial Justícia. Volum 805, ff. 464-465; AVJI, doc. no. 349 (1258, VII, 7).
- (15) ADPC, Secció Històrica, Ms. Arenós, ff. 12v-13v; AVJI, doc. no. 344 (1271, IV, 6).
- (16) ARV, Manaments i Empars, 1632, llibre 6, mà 60, ff. 18-19v; AVJI, doc. no. 387 (1243, III, 9):
nos dompnus Açeyt Aboseyt, netus de Miramomenino, volentes populare christianorum terminum castri de Villa Malefa, facere Villam Formossam, consulte et ex certa scientia, per nos et omnes nostros presentes et futuros damus, et concedimus populationem castri de Villamalefa, ad faciendum Villam Formossam et aldearum totius termini eiusdem, vobis Joanni Selpha, et n'Ofre Esperandeu, et Garcia Sanz, et Petro Ferrer, et Dominico Villarroya, et Dominico Corbarani de Celpha, et Blasco Soriano, et vestris successoribus, et vobiscum simul CXL christianibus populatoribus et successoribus eorundem, et ad plures si convenienter ibi in dicta populatione poterint populari.
- (17) Ibid.: Sicut infra termini de Villamalefa et de Villaformossa includuntur per circuytum, sich sine aliquo retentu et voce mala vocique persone dicta loca per terminos, vobis damus et per populationem dictorum locorum et omnium aldearum, sive alcarearum suarum, et totius termini eiusdem, vobis predictis et vestris damus et concedimus, et numero omnium populorum quos ibi venerint ad populandum, ad quos eis ibidem fuerint assignate hereditates per Martinum Periz et a Dominico Villarroya, quos ad dividendas inter vos et ipsosmet ibi hereditates dictorum locorum, propter quod donamus, assignamus et successoribus illorum in perpetuum, cum planis, riguis, arboribus, montibus, vallibus, terminis et plantis, pasquis, herbis, lignis, garriiciis, devesiis, piscariis, aquis et aqueductibus, furnis, molendinis, introitibus, exitibus, afrontationibus, terminis et suis pertinentiis universis a celo in abiso.
- (18) Ibid.: Sub hac forma et pro hac donatione et populatione, sitis vos et vestri homines nostri, detis de omnibus fructibus vestrarum hereditatum et olivarum, donetis nobis et nostris in perpetuo

decimam, tam pro nobis quam pro ecclesia et non amplius. De fructibus vero aliorum arborum nihil. / Et sich possitis vendere, dare, et obligare hereditates vestras ad quemcumque volueritis, sine laudimio, et de firmamento. / Preterea tamen annuo nobis et nostris dare decimam corderiorum, porcellarum, vitulorum, pullinorum, asinorum, equorum, decimam gallinarum, et eorum fructuum, lanearum et casearum nihil.

- (19) Ibid.: Preterea damus vobis et vestris, in perpetuum, molendinum quod est in populatione majori, quod habeatis francum et liberum sine retentu aliquo, excepto moleant populatores et habitantes in populatione majori; alia vero molendina et omnes furnos dictorum locorum, nobis et nostris libere retinemus. / Preterea a quinque annis in antea teneamini nobis et nostris facere hostem.
- (20) Ibid.: Damus et concedimus vobis et vestris, in perpetuum, primiciam ad opus ecclesiarumstrarum, et concedimus quod filii vestri sint semper rectores in ecclesiis dictorum locorum, dum sint tamen sufficientes in predictis.
- (21) Ibid.: Damus vobis et vestris et omnibus populatoribus et habitantibus dictorum locorum, foros et consuetudines Daroche, et merinum, judices et alcaldes, secundum dictum forum. Et quod habeatis semper patronum fororum Daroche, per quod patronum semper judicemini.
- (22) ADPC, Secció Històrica, Ms. Arenós, ff. 12v-13v; AVJI, doc. no. 344 (1271, IV, 6): A vos Francisco Perez, et Martin Gil, et Sancho Morello, et Andree de Vasaci, et Micaeli de Caballo, et Joanni de Coves, Eximenii de Rada, Dominico Perez de Calasanz, Petro Torlano, Joanni de Zaragoza, et omnibus aliis presentibus et futuris ibi comorantibus atque supervenientibus, et vestrorum successorum, damus inquam predictas hereditates francas, foras, quitas, de peyta et de monedaje, de cenis, de oste et cabalcata, quod non teneamini sequi, nisi tantum per terram nostram, quociescumque novis visum fuerit de dicta seda penitus faciatis novis et nostris.
- (23) Ibid.: Item, damus vovis populatoribus et vestris, et laudamus et concedimus, totam primiciam dicti castri, prout et vos et vestri sustineatis muros dicti castri, et carrerias et ecclesias et quidquid fuerit ministerium, libris, campanis, et omnibus aliis, ut melius videbitur vestre voluntati.
- (24) Ibid.: Predictas hereditates habeatis, teneatis, posideatis, cum montibus, planis, nemoris, lignis, cum venatione et piscariis pro omni rivo, cum caza, et aquis, ribis, et cum portis maximis et minimis, cum secano et sub riguo, cum omnibus arboribus paniferis vel impaniferis cuiusque generis sint, et cum pascuis, hervis viridis et siccis, et cum hermis et laboratis, et cum omnibus iuribus et pertinentiis, et apendenciis sive adjacenciis que dici vel nominari possint, sicut pertinet et pertinere debet predictis hereditatibus vestro bono intellectui et vestrorum, ad habendum, vendendum, dandum, permutandum, alienandum, attribuendum et quidquid volueritis faciendum, preter sanctis et personis religiosis; siquis autem quilibet posint tenere et excambiare et permutare solummodo novis et nostris faciat fidelitatem et homenaje, et sit ovediente cum bono basalo suo domino.
- (25) Ibid.: Et nos dominus Blascus Exemenez, per nos et nostros damus, laudamus et concedimus atque firmiter statuimus, quod vos populatores, vel qui post vos fuerint heredes vestri, quod in

quolibet anno mitatis et eligatis justitiam et portelati cuiusque volueritis mittere et illi coram nostram representemini representari, et nos confirmemus.

- (26) ACA, Cancillería, registro 57, f. 231v (1285, X, 19).
- (27) ACA, Cancillería, registro 85, f. 119 (1291, III, 20). ここでは、国王アルフォンソ3世が、占領したビリャエルモサをペロ・ホルダン・デ・ラ・ペーニャに返還するよう、ゴンサルボに命じている。
- (28) R. I. Burns, Daughter of Abū Zayd, doc. no. 17 (1299, IV, 7).
- (29) アルダがバレンシア市民ポンス・デ・ソレールから借り入れた8,000ソリドゥスの負債をめぐって、ゴンサルボが紛争の矢面に立たされているのがその例の一つである。ARV, Protocolo, no. 16926, ff. 4-4v (1298, X, 15); no. 16927, f. 46v (1298, XII, 20). なお、バレンシア市は、彼らのようにアラゴン王国にルーツをもつバレンシア貴族にとっても、欠かすことのできない経済的かつ法的な中心地であった。ゴンサルボは1302年1月、バレンシア市の毛織物業者からそれぞれ1,600ソリドゥスならびに1,700ソリドゥスでフランス毛織物を購入する一方、同市民バルトメウ・マトーセスに対して負った1,400ソリドゥスの負債の一部を、同市両替商ベルナット・デ・レメーナをつうじて弁済している。ARV, Protocolo, no. 16937, ff. 213 (1302, I, 23), 213-213v (1302, I, 23), 222-222v (1302, I, 28). また、ゴンサルボと弟エシメノが財産分割にあたって、父プラスコと母アルダの遺言状を筆頭にアレノス家の財産にかかわる一連の証書の目録を作成させたのもバレンシア市においてであった。ARV, Protocolo, no. 4177, ff. 54-55 (1305, IX, 25).
- (30) ADPC, Secció Històrica, Ms. Arenós, ff. 19-20; AVJI, doc. no. 385 (1317, VIII, 8): de hoy que esta carta es fecha en cinco años próximos venientes 7.500 sueldos, es a saber por cada un año de ésta en la fiesta de san Miguel del mes de setiembre 1.500 sueldos. / Queriéndoos dar galardón e mandato de los ditos servicios, queremos que otorgásemos a vos e a los vuestros presentes e esdevenideros, la gracia de la septa permanent, que dentro de estos cinco años del dito servicio, que non dades ni seades tenidos de dar herbaje alguno, ni otra pecha, y cumplidos los cinco años del dito hervaje será nuestro, y de los nuestros, porque de lo que nos queremos que cumplidos los ditos cinco años, que vos y los vuestros de deseades tenidos de dar por cada un año, en la fiesta de san Miguel de setiembre, por todos tiempos, 600 sueldos reales, y libras para una cena, y solos los nuestros, que a vos y a los vuestros de los cinco años adelante, que algún pedido ni manda, no vos podamos manifesta ni escondida, sino tan solamente para nuestra caballería, e por casamiento de fillos, a por pasar mar. / E a mayor cumplimiento de la dicha gracia, queremos e atorgamos que saga cada una casa de vosotros, e de los vuestros descendientes de vos en vuestras tierras de regadío, cada tres jornales de tierra para vuestros cáñamos, y linos, hortalizas, de las quales non dedes ni seades tenidos de dar diezmos, ni de potros, ni de pollinos, ni de bezerreros, ni de pollos en ningún tiempo, vos ni los vuestros; y la primicia, que será vuestra e de los vuestros para siempre. / Encara per nos a los nuestros confessamos e otorgamos a vos, e a los vuestros, todos fueros y costumbres d'Aragó. / Enpero retenemos en nos e los nuestros, todos otros

- derechos y señorías, assí ciberales como criminales, que siempre hemos acostumbrado de haber, e vuestes e cabalgadas, mas no alteración de aquellas. なお、アラビア数字が使用されているのは、現存する当該『アレノス写本』が一八世紀後半のコピーだからである。
- (31) ADPC, Secció Històrica, Ms. Arenós, f. 18; AVJI, doc. no. 384 (1317, VIII, 21): D. Gonzalbo y D^a Uraca Jordán de Peña, su muger, por sí y los suyos, y successores, por muchos y agradables beneficios que la villa de Villahermosa les havia hecho assí y a sus antecessores, y que los continuaban, y que voluntariamente por entonces dicha villa les dava 60.000 sueldos para afranquezer dicha villa y varonia que dicho señor tenia enpenada, hizieron gracia a dicha villa, que de allí adelante no pagase más pechas que 1.000 sueldos en la fiesta de san Miguel de setiembre, y que no estuviesen obligados a hazerles servicio alguno. / Más hicieron a la villa la gracia de carta de erbaje. / Más, que no estén obligados a pagar diezmos de cáñamos, linos, hortalizas, de frutos de árboles, lechares, potros, vezeros, pollos, pollinos, ni de abenas. / Confirmaron todas las costumbres y fueros de Aragón, y las cartas de poblaciones de dicha villa, dadas y otorgadas por los antecessores. / Confirmaron la donación de la primicia, y se ofrecieron a no contradecir ni revocar lo sobre dicho. / Se reservaron dichos señores para sí y los suyos el hospedaje y cabañerías, pero no la redempción de aquéllas, sino personalmente hazederas, mas que les ayan de dar cada un año una cena o 200 sueldos, a voluntad de la villa.
- (32) A. Furió, L'impôt direct dans les villes du royaume de Valence, *La fiscalité des villes au Moyen Âge (Occident méditerranéen)*. 2: *Les systèmes fiscaux*, Toulouse, 1999, pp. 169-199; M. Sánchez Marín, El sistema fiscal de los municipios catalanes y valencianos del dominio real en la Baja Edad Media, *Pagar al rey en la Corona de Aragón durante el siglo XIV*, Barcelona, 2003, pp. 427-459; M. Sánchez Martínez, A. Furió and Á. Sesma Muñoz, Old and New Forms of Taxation in the Crown of Aragón (13th-14th Centuries), *La fiscalità nell'economia europea (sec. XIII-XVIII)*. *Atti della Trentanovesima Settimana di Studi dell'Istituto Internazionale di Storia Economica "Francesco Datini" di Prato*, Firenze, 2008, pp. 99-130.
- (33) 6万ソリドゥスという額面は、三子フェランドがアルモガバレス（カタルーニャ傭兵団）に参加して東地中海に出征するべく、1301年5月6日に姪が嫁いだハイメ・ペレス・デ・セゴルベに相続分を売却した際の代価とも、7年後の1308年3月6日にゴンサルボがそれを買戻した際の代価とも一致する。ARV, Reial Justícia, vol. 808, ff. 77v-83v; AVJI, doc. no. 364 (1301, V, 5); ff. 83v-87v; AVJI, doc. no. 376 (1308, III, 6).
- (34) AMP, Documentación notarial, Judiciario, doc. 68, f. 72v (1339, III, 20): Gonçalvo Diaç senyor d'Arenosso aver ovidos e recebidos de vos don Domingo Fustero e Estevan Just jurados de Villa Ferosa absentes mil C sueldos reiales de aquellos quatro mil CC sueldos de pecha que nos por el concello e universitat de Villa Ferosa ami pagar e dar deveades en la primera fiesta de sant Miguel del mes de setiembre, XX dias de março. ここでは、ペイタ4,200ソリドゥスとなっているが、宿泊税200ソリドゥスを含むものとみてよい。
- (35) 1347～48年のユニオンの再結成と反乱の根本的な要因がまさしくそれである。それは、

アラゴン王国の貴族および都市共同体の主導でバレンシア貴族を連ねた13世紀末のそれとは正反対に、売却による王領地減少と反比例して増大する補助税要求に苛まれ、負債の増大に耐えかねたバレンシア市が呼びかけたものであった。V. Baydal Sala, *El's orígens de la revol'ta*, pp. 13-17. カタルーニャについては、フロセル・サバテがこの問題を幾度となく取り上げてきている。すなわち、王権強化の一環として再編成された国王裁判管区は自らの社会経済的な影響圏の法的一体性の維持を図る都市寡頭支配層によって実質的に担われたのであり、王領地売却を図る王権と対抗するなかで、都市共同体の意思こそをあるべき王権の意思と同一視し、次第に国家の担い手としての意識を醸成させてゆくとするのである。F. Sabaté i Curull, *Municipio y monarquía en la Cataluña bajomedieval*, *Anales de la Universidad de Alicante: Historia medieval*, no. 13, 2000-2002, pp. 255-282. なお、当該論文を含む本邦独自企画の論文集が近年翻訳刊行されている。フロセル・サバテ著・阿部俊大監訳『アラゴン連合王国の歴史—中世後期ヨーロッパの一政治モデル—』明石書店、2022年。筆者による同書の書評として、拙稿「【書評】フロセル・サバテ著・阿部俊大監訳『アラゴン連合王国の歴史—中世後期ヨーロッパの一政治モデル—』」『西洋史学論集』第61号、2024年、63-66頁。

- (36) ADPC, Secció Històrica, Ms. Arenós, ff. 16-17; AVJI, doc. no. 383 (1318, IV, 8).
- (37) ARV, Reial Justícia. vol. 24, ff. 482v-486; AVJI, doc. no. 382 (1319, XII, 3).
- (38) 子エシメノ・ベレスは、父エシメノがピリャエルモーサを放棄したことへの補償に、コルテス・デ・アレノスそのものを分与するか、補償金10万ソリドゥスをコルテス・デ・アレノスの収入から毎年3,000ソリドゥスずつ支払うか、いずれかを履行するよう要求して、国王ハイメ2世に訴え出ている。ゴンサルボ・エシメーネスはいずれの要求にも応じず、1316年12月3日、バレンシア貴族の紛争にもかかわらず、アラゴン大法官によって、10万ソリドゥスの補償そのものは有効ながら、いずれにも応ずる必要はないと裁定されている。AHPZ, Colección de la Comisión Provincial de Monumentos de Zaragoza, carpeta 65, no. 432 (1316, XII, 3).
- (39) ACA, Cancillería, registro 482, ff. 113-114 (1330, XI, 4).
- (40) ACA, Cancillería, registro 435, ff. 131v-132 (1329, VIII, 29).
- (41) ARV, Protocolo, no. 2826; AVJI, doc. no. 367 (1331, III, 15): Constituït en presència d'en Johan de Casa, Pero Soriano, [Dominicus Arau et Stephani Justi], justícia e síndichs e procuradors de la universitat de Vilafermosa [... .. Bernardus de Albalato] notari [... ..] procurador del noble en Sanç d'Orta d'Arenós, e [... ..] y com lo dit noble sia senyor de la [vila] de [Vila] fermosa e S [irat] en lo [loc] h de Cirat e de [... ..] pertinències d'aquell e [... ..] dit noble] sia pervengut que la universitat e prohòmens e síndich [... ..] volen fer fe e homenatge com altres coses al noble en Gonçalbo Dieç d'Arenés, [... ..] loch de aquell, per rahó dels dits lochs [... ..] e pertinències d'aquells, la qual cosa ho coses feÿen se farien en gran dan e perjudici del dit noble en Sanç d'Orta, com la dita fe e homenatge e altres coses devien ésser feytes al dit noble en Sanç d'Orta, e no a altre. Et los dits en Johan de Casa et en Pere

Serrano, et en Esthevan Just, contradien e no [.....] a la dita protestació e requisició, e negar les coses en aquella contengudes eren veres [.....] con són contra ells tant solament proposades, e no en plus dien que. I dit noble en Sanç d'Orta no pot ni deu requerir ço que requer, com ell no sia senyor dels dits lochs de Vilafermosa ne de Cirat, ne ha dret alcú en aquells, per tal determenat és stat per lo senyor rey don Alfonso, per sentència per aquell donada appellacione et supplicacione remota, que. I dit noble Sanç d'Orta no ha dret alcú en lo dit loch de Vilafermosa ni en los hòmens que aquell tenia lo dit loch, quan lo tenia per algun just títol, [.....] han assí occupat fortívolment e s'ere alçat en aquell, perquè lo dit senyor rey feu traure lo dit noble del dit castell e vila, e aquell liurà a la noble dona Marquesa Lópiç de Rada, axí com a senyora dels dits lochs e mans, e als habitants del dit loch que a la dita noble feesen sacrament e feultat, e aguesen [.....] térmens [.....] senyora, o qui ella volria, segons que en la dita sentència longament [.....] la qual sentència [.....] ha que és passada en cosa jutjada. / E com ells sien vassalls [.....] noble dona, dien que ells són venguts en la ciutat, de manament de la dita noble senyora [.....] noble Gonçalbo Dieç, fill seu, o a aquella qui [.....] loch seu [.....] tots [.....] e ordenança, axí com a bons vassalls e leals són tenguts fer per [.....] les dites requestes per lo dit noble Sanç d'Orta, com ells no ajen ne tinguen aquell ni [.....] per senyor lur d'els [.....] sinó solament la dita noble dona e el dit fill seu, segons que ella plaurà [.....] manar a ells, ans expressament et neguen los damunt dits en Johan [de Casa], en Pero Soriano, en Domingo Erau e Stehevan Just, que alcun dret pertange en los dits castells e lochs al dit en Sanç d'Orta, ni a altre per aquell, per què si.s volgués [.....] pogire callar de requerir, com que request ha, e de protestar que [.....] li romangue salvu sobre ço en que dret [.....] ni li pertany.

- (42) ACA, Cancillería, registro 531, f. 99v (1332, III, 16).
- (43) AMP, Documentación notarial, Judiciario, doc. 68, f. 8v (1337, III, 6 - IV, 6).
- (44) AMP, Documentación notarial, Judiciario, doc. 68, f. 28v (1337, XII, 6-7).
- (45) AMP, Documentación notarial, Judiciario, doc. 68, f. 36v (1338, II, 16 - III, 14), 40 (1338, III, 14).
- (46) AMP, Documentación notarial, Judiciario, doc. 68, f. 91 (1340, XI, 25), 91 (1340, XI, 25): Puy Pereç de Ceylla notario vecino de Albocacçer..... que vos el nobile don Gonçalvo Diaç senyor d'Arenosso avedes ami pagado e liurado asin como procurador de don Diago Pereç de Ceylla e de Puy Pereç de Ceylla de vecinos de Vilafermosa e de Domingo Vidal stradero vecino de Lucena quatro mil sueldos reyles por vigor e fuerça de cartas publicas de cession e donación feytas e atorgadas por el nobile Sanduerta de Arenosso como apadre legitimo aministrador de las nobiles Huracha Jordan e Saura fillas suyas.
- (47) ACA, Cancillería, registro 482, ff. 113-114 (1330, XI, 4): pro nostro servicio propter utilitatem totius regni Valencie inter cuius regnicolas super foris Aragonum et Valencie et eorum observantiam magna divisio atque contencio vertebatur que toto regno et habitantibus in eodem vehemens

desolacionis exordium minabatur reiecto foro Aragonum que hactenus usus fuistis per quem vobis et locis vestris subscriptis libertates plurime competeabantur. Nunc foro Valencie et eius observantia adhesistis pro quod plures alii milites et generosi eiusdem regni vestra sequentes vestigia predicta predicto foro Valencie similiter adhererunt ex quo in parte predicta divisione remota, predictum regnum manebit de cetero in statu pacifico et tranquillo. Ideo dignum et debitum arbitantes ut in compensacionem dictarum libertatum quibus propter commune bonum cedere decrevistis nobis aliquam gratiam faciamus.

- (48) AMV, Lletres missives, G-3, ff. 11-13 (1334, VII, 29), 13v (1334, VII); V. Baydal Sala, *Els fonaments del pactisme valencià. Sistemes fiscals, relacions de poder i identitat col·lectiva al regne de València (c. 1250 - c. 1365)*, Tesi doctoral, Universitat Pompeu Fabra, 2011, p. 549: per raon dels furs d'Aragó, los quals los sobredits affermen si haver e deure d'aquells usar..... molt que en Gonçalbo Díez d'Arenós se meta en tal qüestió ab lo senyor rey ne ab lo General del regne, car cert és que·ls hòmens de Vilafermosa e ell són subjugats e deuen ésser a fur de València, e abans que·l senyor rey en Pere anàs e passàs en Sicília ell e els seus e tots los nobles del regne eren de fur de València.
- (49) ACA, Cancillería, registro 990, ff. 126, (126v y 127: blanc), 127v-128 (1343, V, 7): universsa jura que homines et universitates locorum nostrorum de Vilafferrnosa et de Çirat situatos in regno Valentie et singulares ex eis tam christiani quam sarraceni presentes pariter et futuri nobis seu officialibus nostris tenient soluent in omnibus et singularis locis regnorum et tenientes nostrarum que hodie habemus seu tenemus et in antea dante dicto nos vel nostri atquiremus quocumque titulo uel atquiere podimus ubicumque sint et concumque tam per terras per mare et quamlibus aqua dulce none cuiscumque lezde pedagii penssi menssuratia portatici passagii erbatici carneragii et cabezagii.